

レトリック作文の可能性 その2

— 付加と省略 —

伊土 耕平

筆者は岡山大学において2001～2012年の間に「レトリックと認識・発想」という教養教育科目を計7回開講した。そこではレトリック技法の概説と具体例の分析を行って基礎的知識を身に付けるとともに、実際に文章を書いてみることによって、認識力と発想力の向上をはかろうとした。本稿では中村2007のレトリック技法のうち付加と省略を取り上げ、技法についての考え方、効果的な教材、指導上の問題点などについて考える。

Keywords : rhetoric, composition, attachment, ellipsis

1. はじめに

筆者（本稿の筆者。以下同じ）は岡山大学において「レトリックと認識・発想」という教養教育科目を2001, 2003, 2005, 2007, 2008, 2010, 2012年度の計7回開講してきた。大学教育において、レトリックを認識力・発想力の向上に活用できないか、というのが基本的な問題意識である。この科目の内容については前稿（伊土2013）に書いたもので、ここでは繰り返さない。

ところで先日、2012年度後期の授業評価アンケートの結果が出た。この科目の総合評価は3.9と、4をわずかに下回ってしまった（回答29名）。それ以前の6回の開講で4を下回った記憶はないので、残念である。後期の月曜1限といういやな時間帯で、こちらもあまり意気があがらず、学生の反応も全体的に今一つであった。それはともかく、前稿や本稿で授業内容を再吟味し、今後少しでも良い授業となるようにしなくてはならない。

さて、筆者は独自のレトリック体系を構築していないので、先賢のものの中から中村2007の体系を授業に利用させてもらっている。その枠組みは次のようなものである。

I. 展開のレトリック：

1. 配列
2. 反復
3. 付加
4. 省略

II. 伝達のレトリック：

5. 間接
6. 置換
7. 多重
8. 摩擦

この体系そのものについて、および各技法の簡単な説明方法については、前稿で述べたので繰り返さない。さらに前稿では、配列のレトリックと反復のレトリックについて、多くの具体例（教材として使用したもの）を用いて、技法の表現効果や説明方法、さまざまな問題点などについて検討した。今回はその続きとして、付加と省略の技法を取り上げて、同様の検討を行うことにする。言葉の量を増やす方向の技法と、反対に減らす方向の技法である。

受講生の作文のうち、よくまとまっているものを授業の配布プリントの中で紹介している。本稿でもそれらを使いたいと思ったが、執筆者の承諾を得ていないので割愛する。ただしごく一部分を例として挙げることはある。また、授業中の受講生の反応についても言及することがある。

本稿は具体例をもとにした考察が中心となっている。その具体例は、筆者が約20年をかけて収集した2万件近いデータの中から厳選したもので、面白い例が多く、受講生の興味を引くに足ると思っ（また、面白いほうが記憶に残る）。なお、以下に示す用例がすでに先行研究で使用されていること

は、管見の限り、ない。しかし、もしあった場合はご容赦を願いたい。

2. 「付加」のレトリックに関わる諸問題

2.1 概観

まずは言葉の量を増やす「付加」の技法である。中村2007の体系では37種の技法が区別され、接辞などの小さな単位を操作するものから始まって、順にコード番号が振られている。よく使われるものを選んで、下記のように分類して、授業では説明している（カッコ内はコード番号。以下同じ）。

- a. あまり意味のない言葉を付加する：虚辞 (3.1.1), 枕詞 (3.2.1), 冗語法 (3.3), 強調重複 (3.4.2), 情化法 (3.6), など
- b. 接続語を多く付加する：接叙法 (3.7.1)
- c. 細部へのこだわり：点描法 (3.8.2), 詳悉法 (3.9), 列叙法 (3.10)
- d. ものの多さや種類の多さを述べる：列举法 (3.11)
- e. 訂正などを付加：挙例法 (3.8), ためらい (3.13.2), 修辭的訂正 (3.13.3), 修辭的換言 (3.13.4), など

以下に、上の分類ごとに検討する。前稿と同様、例文の末尾にカギカッコに入れて出典情報を記す。『』は単行本の類, 「」はそれらに所収された作品などである。例文中の／は、原文の改行箇所である（スペース節約のために詰めた）。

2.2 あまり意味のない言葉の付加 (3.1～3.6)

まずは接頭語などを付加する表現が問題となる。例えば、真正・完全・純粹などの意を表す「ま」という接頭語を使うと、情緒的なしみじみとした感じを付加することができる。次のような例をこれまでよく使った。

(1) まがなしくいのち二つとなりし身を泉のごとき
夜の湯に浸す [河野裕子『ひるがほ』]

(2) 天の戸をあなおもしろと分け出でし神の笑まひ
に世はまかがやく [岡野弘彦, 歌会始の儀の選者詠。朝日新聞2006.1.13より]

「ま」という一字を付け加えるだけで、(1)は愛情深い感じ、(2)は晴れ晴れとしためでたい感じを付加することができる。これらは情化法 (3.6) である。もっとも、「まが(か)なし」のほうはすでに万葉集に例があり一語化しているとも言えるが、語源的にマ+カナ(愛)シであることは確実であるから、

付加の例として扱うことにする。

次に、「重複する言葉」もあまり意味がなく、付加的である。よくあるのは、余分な言葉を付加しておもしろい表現を作る「馬から落ちて落馬して」の類である（冗語法3.3）。無意識にそのような言葉を連発する人もいる。代表格は、元・巨人軍の長嶋茂雄氏で、受講生の作文の中にも長嶋氏の「巨人軍は永遠に不滅です！」を取り上げたものがあった(2010年度)。ちなみに飯間2003には、氏の言葉として次のような例が紹介されている (p.140)。

(3) 「いまの現在の心境」「次の後継者に…」 「一番ベストだと考えました」「若い世代のパワーと力」

おもしろがるだけでは能がないので、2012年度の授業では次のようなことをしてみた。受講者に、次例のどの部分が重複か質問したのである。

(4) しかし、そのうち彼らも寝てしまった。あつという間に一様にすばやく寝こんでしまった。ずらりと河岸にあげられたマグロのように寝入っている中学生たちは、とりどりの寝息を洩らし、その寝息の一つ一つが傲慢な自負のように周二には思われた。 [北杜夫『楡家の人々 第三部』]

答えは「あつという間に」と「すばやく」である。では、作者はなぜそのような表現をしたのか？ 受講生の一人は、早さを強調するため、と言った。確かに、これは強調重複 (3.4.2) の例である。しかしそれだけではなく、よく考えると、「すばやく」は通常、意志的な動作のありかたを修飾する。「寝こむ」という非意志的な動作を修飾すると異例結合 (8.10) 的になる。そういう「摩擦」の要素もある。

以上、あまり意味のない言葉の付加について述べた。あまり意味がないと言っても「ま」などは独特なニュアンスを付け加えることができる。同時に、わが子を特に「まがなし」、この世を特に「まかがやく」と表現するのは、そのような特別なものとして捉えている、つまり認識のあり方を表していると言ってよい。そして「ま——」がそのような表現であると知った、あるいは再確認した受講生は、認識力や表現力の幅が少し広がったと言えるのではないか。

2.3 接続語を多く付加する

接叙法 (3.7.1) は「文と文との間に接続語を多用することで、切れめのない文展開を企てる修辭技法」である（中村2007：465）。2010年の授業では例文を四つ出したが、一つだけ掲げよう。

(5)奈良はいい所だが、男の児を育てるには何か物足らぬものを感じ、東京へ引越して来たが、私自身は未だに未練があり、今でも或時小さな家でも建て、もう一度住んで見たい気がしている。〔志賀直哉「早春の旅」〕

「接続語」には、接続詞だけではなく接続助詞も含める。上の例を使う理由は、志賀は簡潔な男性的な文章を書くことで有名である。にも関わらず、上の例は何となくまだるっこしい。それが面白いと思ったからである。しかし、最近の学生は志賀などはあまり読まないようで、あまり面白くなかったかもしれない。

2012年の授業では、(5)はやめて次のような例を出した。作者である北杜夫(2011年10月没)の追悼の意味合いを込めている。

(6)その海は、かつて楡徹吉や龍子が渡った同じ海、さらに古くは基一郎が渡った同じ印度洋である。船客たちはデッキ・チェアに寝そべり、無聊と退屈さに欠伸をし、「あ、トビウオ！」などつかのまの気散じをし、むくむくと湧き立つ積乱雲が絢爛と色を変える夕べには、そぞろに故国のことをしのんだりした同じ海である。／もとより城木達紀にはそのようなことに関係はない。〔北杜夫『楡家の人々 第三部』〕

文章のただらだと続くところが「無聊と退屈さ」をよく表現していると筆者は思うのだが、受講生の一人に聞いたところ、連続する感じがよく出ているという答えだった。「船客たち」が一斉に寝そべり、次にあくびをし…、ということだろうか。筆者とはだいぶ受け止め方が違う。

接続語の多い文章というと法律文の類が頭に浮かぶ。授業でもよく使った。ふだん読まないような文章なので、珍しがるのではないかと考えてのことでもある。2010、2012年は世界人権宣言を使った。

(7)よって、ここに、国際連合総会は、／社会の各個人及び各機関が、この世界人権宣言を常に念頭に置きながら、加盟国自身の人民の間にも、また、加盟国の管轄下にある地域の人民の間にも、これらの権利と自由との尊重を指導及び教育によって促進すること並びにそれらの普遍的かつ効果的な承認と遵守とを国内的及び国際的な漸進的措置によって確保することに努力するように、すべての人民とすべての国とが達成すべき共通の規準とし

て、／この世界人権宣言を公布する。〔世界人権宣言、1948〕

非常にわかりにくい文章だが、接続詞を使い分けることによって多少は意味が取りやすくなっている。法律用語としては、同じ並列でも「及び」は小さなまとまりを作り、「並びに」はより大きなまとまりを作る。つまり、[[A及びB]並びにC]という構造になるのである。上の例で言えば、[…指導及び教育によって促進すること]と、[…国内的及び国際的な漸進的措置によって確保すること]とが「並びに」で結合させられているのである。ちなみに2012年の授業では、法学部の学生一人がこのような使い分けを知っていた。

以上、接続語を多用するのは、どちらかと言えばわかりにくくなることが多い。その点、「国語を適切に表現し…」という学習指導要領の目標(小中高とも)からは離れるが、大学生が“他山の石”として参考にするのは意味があると考えられる。

2.4 細部へのこだわり

必要以上に言葉を費やすと、よく言えばじっくりとした、悪く言えばくどい、文章となる。用例を集めてみると、なぜか人の顔の描写が多く、大抵はその顔の不細工さを強調する。技法としては列叙法(3.10)である。例えば、

(8)彼女の顔立ちは正直なところ一風変わっている。というか、どう好意的に見ても、整ったものではない。額は広くて、鼻は小さく丸く、頬はそばかすだらけだ。□□□□。どちらかといえかなり目だつくりの顔だ。乱暴なつくりといってもいいくらいだ。〔村上春樹『海辺のカフカ』〕

あまり意味のない空欄補充問題であるが、発想の訓練のつもりである。受講生に聞くと「目が小さい」などの答えがあった。正解は「耳も尖っている」。上(額)から下(鼻)へ、次に横(頬)へ、とくると次は耳が普通だと思ったが(=序次法1.1)、そうはいかなかった。「目」だと、また上にあがることになるから変だと思うのだが。しかし、顔の中で着目される部位のうち、残っているのは目と口くらいであろうか。そう考えると、受講生の考えもわからなくはない。

ところで、細部にこだわると悪意のある描写になりがちなのはなぜか。佐藤1978(第6章)の言うところを上例に適用すれば次のようになろう。「彼女の顔立ちは変わっている」と一言で言えばすむのに

無理をして、言葉の量を現実とつりあわせようとする。その結果おおげさな表現となる。以下筆者の考えだが、おおげさな表現は皮肉などがこもりやすく、悪意のあるものとなりやすい。

それはともかく、細部にこだわるというのは認識のあり方の一つである。

2.5 ものの多さや種類の多さを述べる

これは列挙法(3.11)が代表的なものである。列挙法は同格のものを並べ立てていくので、一見すると反復と思われるが、ものの量などが増えていくので、付加に入れるのである。ものや種類の多さを効果的に表現するが、さらには混沌や混乱などを表現する場合も多い(拙稿2008a)。

授業でよく使う例は次のものである。

(9) (解体前の旧家にて。) 押入からは煤けた長持箱が出てきた。フタを開けると、古着に混じって女の子の七五三の宮参りの着物や帯が入っている。小さな布包みを解くと、帯揚げ、腰巻、はこせこ、扇子、など愛らしい小物がしまわれていた。[村田喜代子『人が見たら蛙に化れ』]

これは発想と言うよりは単なる知識の問題であるが、着物に詳しい学生は喜んで「帯留」などと言う。しかし正解は「簪」である。じつはこの例は、次の例と比較するとおもしろいのである。

(10) 競り荷を広げたトレイは、ローラーに載って出てくる仕掛けだ。建吾はそれを眺めてニヤリとした。／「何や。今日も大したお宝の山やないか」／色焼けした漆器の椀揃い。／時代のない有田焼の皿。/デパートの進物食器。/毀れた古戸棚、動かない柱時計。/色の剥げたブリキの玩具。/耳に当てる部分が外れた聴診器。 [同上]

通称「ドロボー市」という、地方の骨董市の光景である。ガラクタばかりである。同じ列挙法でも、「愛らしい小物」にふさわしいのは(9)のような、あっさりした名詞だけの列挙であり、(10)のような連体修飾語のついたごてごてした名詞句の列挙は、アクの強い、個性的な物にふさわしいのである(拙稿2008b)。もう少し一般化して言えば、連体節つきの長い名詞句を列挙すると勢いのよさがなくなり、マイナスのイメージが付随することが多い(拙稿2008a)。

以上、列挙される要素の形態によってニュアンスに違いがあることを見た。あっさり／ごてごてなどといった違いは認識のあり方の違いとも言える。

2.6 訂正などを付加

ここには、修辭的訂正(3.13.3)や修辭的換言(3.13.4)などが入る。まず前者は、例えば次のようなものである。

(11) 旅とはそもそも非日常の体験である。だからこそ楽しく、創造力の刺激ともなり、思いがけぬ風物に接して心も豊かになる。しかしその旅もかくのごとく度を越せば、日常の空間移動にほかならず、旅先作家というよりむしろ、商社員か芸能人の生活に似てくる。いや、同然というべきであろう。 [浅田次郎「旅先作家」、『つばさよつばさ』所収]

前稿でも述べたが、ある技法の表現効果を考える場合、その技法を使っていない類義の表現と比較してみるのが効果的である。この例の場合は「旅先作家ではなく、商社員か芸能人の生活と同然というべきであろう。」と表現した場合と比較して、どう違うのか考えてみる。受講生に考えを聞くと「自嘲的になっている」という答えがあった。それはあるかもしれないが、二つの表現の違いの説明にはなっていない。筆者は、(11)のほうは、「似てくる」ような感じがしたのだがよく考えると「同然」であったという、認識過程に沿った表現になっていると考える。

(12) (冒頭) 昭和十九年七月——。／横浜港は、見るかげもない港、いや、見たこともない港に変わり果てていた。／棧橋は迷彩にくすみ、芝生の緑は剥ぎとられ、夏というのに波止場に行く人の姿は暗く乏しい。にぶく静まった港内には、もちろん外国船のかげ一つなく、N・Y・K、O・S・Kなどの巨船の姿もない。／ [城山三郎「硫黄島に死す』]

この例も、なぜ最初から「横浜港は、見たこともない港に変わり果てていた。」と言ってはいけないのか。「見るかげもない」ならば多少は面影が残っているが、「見たこともない」ではそれすら残っていない。つまり、よりひどい光景であるということ強調しているのである。あるいは、(11)と同じく、認識自体が「見るかげもない」から「見たこともない」に推移したとも考えられる。

以上の2例は「いや」という語を使って「訂正」しているのであるが、若者に人気の作家の作品から採取した次の例は、「正確に言」い代える、修辭的“換言”の例である。

(13)灰皿を、クソガキの左眉の出っ張りの部分、正確に言えば、眼窩上隆起の部分に、擦るようにして叩きつけた。この部分は皮膚が薄くて切れやすい。ガスッ、という音がした。スイートスポットに当たった音だった。／クソガキは少しだけ後ろによるけながら、反射的に左手を眼窩上隆起に添えた。目の焦点がほとんど合っていない。パニックに陥っていた。〔金城 一紀『GO』〕

「出っ張りの部分に、擦るようにして叩きつけた。」だけでは、なぜ十分ではないのか。受講生に聞くと「より詳しく述べるため」と答えたことがある。しかしこれでは「正確に言えば」をなぞっただけである。筆者は、主人公の冷静さを強調するため、と考える。主人公はケンカをしながらも、「眼窩上隆起」という専門用語を思い出すことができるほど、冷静だったのである。

次のような、具体例を付加する挙例法(3.8)も、ここに入れてよいであろう。

(14)(巨人軍の引退試合後)グラウンド一周を終えた長嶋(茂雄)を、丸井(球場副支配人)はバックネット前で出迎えた。ふとスタンドを見上げると、3人連れの老婦人が両手を合わせて長嶋を拜んでいた。1人は着物姿。ファン層の広さに改めて感心したことを覚えている。〔ニッポン人脈記 ONがいた7, 朝日新聞2012.8.23〕

「拜んでいた」というのがほほえましい。「3人連れの老婦人が…拜んでいた」が「ファン層の広さ」の具体例というわけである。それほど印象的な具体例があったという、認識の問題でもある。なお、この例はこれまで間接の一つ、修辭的帰納法(5.15.4)の例として使ってきたのであるが、「ファン層の広さ」という言葉で主張が明示されているのであるから、間接ではなく、付加と考えるべきであろう。過去の受講生には申し訳ないが、ここで訂正させていただく。

以上、訂正などを付加する技法は、表現としてみれば何らかの強調であるものが多いが、認識のあり方を表していると考えられるものも多い。

2.7 付加のまとめ

この節では言葉を付け加えるタイプの技法を見てきた。言葉を付け加えると、その言葉の持つ意味だけではなく、さまざまなニュアンスが追加されるのである。また、認識のあり方を同時に表すことも多い。認識のあり方を具体的に知れば、受講生の認識

力も多少は広がると考えている。

世の文章作法書では文章は簡潔なものがよいとされるが、余分な要素などを付加することで、さまざまな興味深い表現が可能となることも多いのである。このようなことを具体的に学習することもレトリック作文の可能性の一つであると考ええる。

3. 「省略」のレトリックに関わる諸問題

3.1 概観

前節では言葉の量を増やす技法を見た。本節では逆に、言葉の量を減らす技法を見る。

日本語には省略が多いと言われるが、その省略にもいろいろある。中村2007では23種が区別され、例によって小さな単位を操作するものから順に若いコード番号がふられているが、よく使われるものを選び、似たものをまとめてみると次のようになる。以下に、それぞれについて検討する。

- a. 単語内部での省略：頭部省略(4.2.1)など
- b. 文章の中での省略：脱落(4.2.2), 主辞内顕(4.3), 断叙法(4.4.1), 頓絶法(4.10.2)など
- c. 端的な表現：省筆(4.6), 警句法(4.8)
- d. 名詞に関わるもの：体言止め(4.12.1), 名詞提示(4.12.2)

3.2 単語内部での省略

まずは単語や形態素といった小さな単位の省略である。

いわゆる略語は、長たらしい名を短縮するという実用的な意味もあるが、若者が面白がって使うという側面もある。筆者の若いころは、「る」をつけて「事故る」「江川る」(＝正当でない方法を使って自分の希望を通す)などと表現していた。これまで授業で取り上げた例を列挙すると、次のようになる(出典は省略)。

(15)せんべろ酒場, タワケ先輩, こそ丸^{がん}, あいもこ, かくしか

それぞれ、千円でべろべろになるほど飲める酒場、タワシのように毛が硬い先輩、「○○(＝人名)がおればこそ」と念じて飲む薬(気分がすぐれないときなどに効くという岡山発の薬)、曖昧模糊、かくしかじか、の略である。これらは単におもしろいだけで、とくに認識や発想に効果があるとは言えない。しかし、おもしろい表現に接するとリラックスでき、その結果よい発想が出てくる可能性が高くなる。

略語は隠語にもある。集団内で独特な語を使い、身内意識を高めるなどする。かつては次のような例を紹介した。これらは頭部省略(4.2.1)である。

(16) 「仕事はなにや」／(中略)／「ポリは“犬”，逮捕されるのを“カマる”という。つまり，つかまるの略でんな。」〔開高 健『日本三文オペラ』〕

この頭部省略に類するものとして“尾部”省略も考えてよい。上述の「せんべろ」などもそうであるが、いわゆる頭文字も同類である。2010年度の作文の中に「JK, JD, JN」というのがあった。それぞれ女子高生、女子大学生、女子ニート(浪人生)であると言う(浪人であればJRがよいと思うが)。

なお、以前ゴキブリのことをGと略した作文があり、面白いとほめたことがあるが、授業終了後に別の受講生が、それはある漫才師のネタであると指摘した。以後、他人のアイデアを無断で使用しないようにと注意するようにしている。

以上の単語レベルでの省略は、認識や発想とはあまり関係がないようだ。ただし「せんべろ」のような命名は、「千円」と「べろべろ」という注目点のみを取り出しているという点では認識のあり方の一つと考えられる。

3.3 文章の中での省略

この中にも、小さな単位から大きな単位のものまで、さまざまな省略がある。主な技法を小→大の順に並べてみると、次のようになる(下線部は省略される単位。説明は中村2007(p.462)のものを簡略化した)。

脱落(4.2.2)：リズムの都合で助詞などを省略する。

主辞内頭(4.3)：主語を言語化しない。

断叙法(4.4.1)：接続語を省き、繋がりを断つ。

黙説法(4.9)：言いよどんだり、ことばを濁したり、具体的な内容を意図的に省いたりして表現を完結させない。

場面カット(4.7.2)：作品展開上、次に予測される場面をそっくり省く。

上記のうち「主語」と「接続語」は同じ大きさと考える。便宜的にコード番号が若いほうを上にした。

これまで授業でよく取り上げたのは、まず断叙法である。例えば、次例をよく使った。

(17) (追手に指名され) 沖田は屯所へ駆けもどった。

／馬に乗った。／駆けた。／寒い。口鼻からはいりこんでくる冷気が、鞍の上で、沖田を咳きこませた。〔司馬遼太郎『燃えよ剣』〕

一つ一つの行為(最後の「寒い」は状態)のつながりを断って、孤立させている。そういうものの連続として認識し、表現している。前節で見た接叙法(3.7.1)がもたもたするのは反対に、キレがあり、スピード感がある。なお、この技法は受講生に人気があり、作文でよく使われる。ちなみにこの例は、主語が省略されているので主辞内頭でもある(最後の「寒い」は除く)。

上の中では黙説法も人気がある。作文をさせると、受講生の何人かは黙説法を使ってみるのである。上の説明ではわかりにくいのが、中村2007(p.407f)は、例えば、登場人物Aの発話はそのまま会話文で表現し、登場人物Bの発話は省略して、Aのほうを「生々しく描き出す」技法を黙説法に含めている(厳密には無声伝達4.9.1と言う)。中村氏は山本周五郎『青べか物語』から例を引いているが、筆者は同じ作品の違う箇所から例を採って2010年度の授業で使用した。

(18) 「あたし心中したことがあるのよ、先生」と栄子は云った、「飲ましてね」／もう何杯も飲んでいるのである。私が質問すると、栄子は湯呑のふちを舐めた。(中略)「その話をすっからさ、根戸川亭からなにか取ろうよ、ねえ、景気つけちゃおうよ先生」／私が答えると栄子は舌打ちをし、下唇を突き出しながら湯呑へ酒を注いだ。〔山本周五郎『青べか物語』〕

あまり健全な内容ではないが、面白いので使ってみた。「栄子」の発話は省略せず「私」の発話を省略している。作文に黙説法を使う受講生が複数いたことからすれば、けっこうインパクトがあったのではないかと判断する。ちなみにこの作品の舞台は千葉県の浦安がモデルで、今では東京ディズニーランドのある、しゃれた地域になっている。

この黙説法は、言語学や心理学で言う「前景／背景」の応用である。二つのものの認識の鮮明度が異なるわけである。このような技法を知り、実際に使ってみるにより、受講生の認識力と発想力が少しでも広がることを期待している。

場面カットの例も一つ挙げよう。

(19) ゆみ子は、お父さんに花をもらおうと、キャッキヤッと足をばたつかせて喜びました。／お父さん

は、それを見てにっこり笑うと、何も言わずに、汽車に乗って行ってしまいました。ゆみ子のにぎっている、一つの花を見つめながら——。／／それから十年の年月がすぎました。／ゆみ子は、お父さんの顔を覚えていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないのかもしれない。 [今西祐行「一つの花」]

光村図書の小学四年用の教科書（2011年他）などにも採られている有名な作品である。「十年の年月」に起こった出来事が省略されているわけである。この教科書ではこの部分の省略について何も指導しないようであるが、例えば「お父さんはとうとう帰ってきませんでした。」のようにある程度説明してしまう表現と比較してどのように違うか、などを子供に考えさせるのもよいのではないか。父さんは帰ってこなかったと表現するほうが悲しいと言う子供もいるかもしれない。あるいは、悲しいことは書かないほうが余計に悲しいと言う子供もいるかもしれない。

以上、文章中におけるさまざまな単位の省略を見た。そのうちの多くは、認識と関係が深い。

3.4 端的な表現

俳句は代表的な省略の文学である。中には、省略しすぎて内容がよくわからない作品も多い。江戸時代の雑俳集である『武玉川』なども、ただ読んだだけでは筆者にはよくわからない作品も多いが、たまたま読んだ『角川 俳句』51巻10号（2002）に次のような作品が解説されていた。

(20) 追手の中に^{むこ}聳になる人

ここまでくると、省略と言うより、ある出来事の中から一点だけに焦点を当てる表現と考えたほうがよいのではないかと思えてくる。そのように考えて「端的な表現」と呼ぶことにした。

さて(20)であるが、昔は親が結婚相手を決めることが多かった。結婚式当日に相思相愛の本命が嫁を略奪していき、それを追いかける人の中に親の決めた婿も交じっているという笑い話である。筆者などはアメリカ映画『卒業』（1967年）のラスト・シーンを思い出す。2007年度以前に(20)を省筆（4.6）の極端なものとして紹介したが、受講生の中でこの句の内容を理解できた者は、記憶するかぎり一人もいなかった。

警句法（4.8）も端的な表現に入れてよいだろう。よく使う例は次のものである。

(21) ^{いくたり}幾人の心見殺す職業か校廊の灯は消えておそろし [米川千嘉子『夏空の權』（折々のうた、朝日新聞2003.4.16より）]

「見殺す」という語がショッキングである。筆者も教員生活が長いですが、思い当たるふしは多く、気が付いていない事例はさらに多いであろう。そのようなわけでこの歌は印象に残った。しかし受講生は、それほど切実に受け止めはしなかったようである。

以上、焦点となる事物や問題点を端的に取り立てる表現を見た。これらは、それのみに集中して他を見ないという認識のあり方を表している。また、省略とは言いにくいと述べたが、言葉数を減らすという方向の技法であるから、少なくとも中村体系の中では、省略に入れるのが妥当であろう。

3.5 名詞に関わるもの

体言止め（4.12.1）と名詞提示（4.12.2）のことである。これらは特徴的な表現であるので、他と区別して扱うことにしている。

まず、体言止めは小学校でも学習する。例えば次の例を筆者はよく使う。

(22) (冒頭) 選手入場と同時に旗が揺れ動き「ファジアーノ！」の大歓声___。キックオフ前から盛り上がった。岡山市のカンコースタジアムであったJリーグ2部（J2）ファジアーノ岡山の今季ホーム初戦である／相手は横浜FC。手ごわい。だが、選手の動きは負けていなかった。積極的にボールを奪い、シュートを放つ。スタンドの声援が選手の背中を押しているのが実感できた／ [滴一滴、山陽新聞2010.3.14]

ファジアーノがJ2に昇格して2年目の記事である。「(大歓声) が起こった」などの述語が省略されているわけである。体言止めのあとには余韻が残るとされる。この例では、後ろに「盛り上がった」とあることからわかるように、感動がぐっと盛り上がる感じがする。

次に名詞提示とは、「情報の周囲を切り落とし、中核部の名詞を掲げて、時・処などの場面設定や題目提示などをおこなう」技法である（中村2007：462）。次のうち(23)は時、(24)は所を提示している。

(23) = (12) (冒頭) 昭和十九年七月——。／横浜港は、見るかげもない港、いや、見たこともない港に変わり果てていた。／棧橋は迷彩にくすみ、芝生

の緑は剥ぎとられ、夏というのに波止場に行く人の姿は暗く乏しい。にぶく静まった港内には、もちろん外国船のかげ一つなく、N・Y・K、O・S・Kなどの巨船の姿もない。／〔城山三郎「硫黄島に死す」〕

⑭(冒頭) 投手戦の張り詰めた空気を、白球が切り裂いていく。右翼席。リーグ制覇を目前に熱狂する巨人ファンのもとへ、決勝2ランが吸い込まれていった。／決めたのは、亀井だ。6回1死一塁。チェンのスライダーに体勢を崩されたが、バットに乗せた。〔巨人M1 V王手, 朝日新聞 2009.9.23〕

⑭は、「右翼席で、リーグ制覇を目前に熱狂する巨人ファンのもとへ、決勝2ランが吸い込まれていった。」と表現した場合とどう違うか。⑭のようにしたほうが「右翼席」という場所に焦点があてられ、いったんそこで叙述が途切れる。その結果、場面が明確に変わると、まずは言える。

「題目提示」の例としては、次のものを2012年度には使った。

⑮漠とした憧憬。これこそ物事の始まりではなからうか。子供から青春期へ移ろうとする目に見えぬ胎動ではなからうか。〔北 杜夫『どくとるマンボウ青春記』〕

後続する「これ」という語が指示しているので、下線部は独立度が少し低い。その意味では中村氏の考える名詞提示の範疇には入らないのかもしれない。それはともかく、「漠とした憧憬こそ、物事の始まりではなからうか。」という表現に比べれば、題目(テーマ)が明確に切り出され、提示されている。

次のような例はどうであろうか。

⑯(地震により谷間の棚田荒れにしを痛みつつ見る山古志の里) ——新潟県中越地震の被災地を見舞われたときの天皇陛下のお歌だ／〔よみうり寸評, 読売新聞 2009.11.13〕

通常これは体言止めとされるが、さきの⑭のような述語の省略はない。山田孝雄(山田 1936: 第45章など)が述体と喚体に分けたときの喚体句である。すなわち、呼格の名詞「山古志の里」に連体修飾節(「地震により～見る」)が付くという構造で、感動などを表す。述体句が「(私が) 山古志の里を見る」

というように事態を二元的・理性的に表現するのに対し、喚体句は一元的・直観的に、対象に呼掛ける形で表現する。一つの名詞を中心とした非分析的な表現で情意が籠る、という点が本質的なことであり、名詞提示もその延長線上にあると筆者は考える。

すなわち、先の⑬は名詞だけの表現であるが、ダッシュが付いていることから察せられるように、余情(例えば、戦争も終わりが近づいたなあ。)が込められている。⑭も、単なる場所ではなく、巨人ファンの大勢いる、思いの籠った場所としての右翼席、というのである。言葉で感情を説明せず名詞だけを提示して、余情をほのめかすという点では⑯と変わりが無い。⑮も、青春初期の大切なもの、という思いが籠っており、同様に考えてよいのではない。名詞提示の多くには情意が籠ると結論したい。⑯のようにその名詞に関する情報量が多いと、それだけ状況がわかり、情意が理解しやすくなる。⑬～⑮とは程度の差しかないと考える。

ちなみに、尾上 1998 が一語文について詳細な論を展開しているが、情意が籠るということあまり述べていない。その後の尾上 2006 では、一語文は存在承認か希求であるとし、希求以外の情意については言及していない。また柳澤 2011 は、このような構造の文は倒置構文であって、省略ではないとする。省略ではないという点は正しいと思うが、山田に従えば、倒置ではなく、日本語にはもともと二種類の構文があると考えるのである。

とにかく、筆者は⑯のようなものも名詞提示に含めて説明している。中村氏の考えとはおそらく異なるであろう。しかし、中村 2007 (p.403) には名詞提示の例として、島崎藤村『夜明け前』の「降った雪の溶けずに凍る馬籠峠の上。」という文などが挙げられている。つまり、「連体修飾節+名詞」という形も名詞提示と認められるのである。これと⑯は、少なくとも構造的には同じであるから、ともに名詞提示とすることもそれほど無理ではないのではないかと(もっとも、前後の文脈の有無という点は異なる)。

さて、もう少し例を追加しよう。

⑰やがて日暮れには、その小さな町の盛り場の飲み屋を、一軒一軒まわって歩く。酔客にからまれたり、バーテンにつっけんどんに断られたりしながら、新曲をうたい、挨拶をし、レコードを一枚ずつ買ってもらう。／深夜、疲れ切った二人は、わびしい宿のせんべいぶとんにくるまりながら、明日の予定をぼそぼそと語り合う。窓を打つ風と雨の音。遠くの夜汽車の汽笛。〔五木寛之『青春の門 再起篇』〕

(28)拓大卒業後、観光会社などに勤務。2004年のアテネ五輪をめざしたが、予選で敗退。会社員として生きようと、グローブを置いた。／仕事の後に練習はない。友人と飲み歩く日々。「気持ちの整理はついた」つもりでいた。それなのに、2カ月もすると飽きてきて、「プロで戦う仲間が格好良く見えた」。「フロントランナー 内山高志(スーパーフェザー級王者)、朝日新聞2012.2.4]

それぞれ、下線を付けた部分が名詞提示と考える(正確には「名詞句提示」だが、今は慣用に従う)。(27)は背景となる二つの音を余情を込めて表現している。背景も場面設定の一つだから、先述の名詞提示の定義に合う。(28)は時の表現ではあるが、それよりも、事実だけを提示し説明を排して、心の満たされない日々を余情を込めて表現しているのではないか。いずれも名詞句を提示することによって余情が籠る。これが名詞提示の本質である。認識に関して言えば、非分析的な認識である。

3.6 省略のまとめ

以上、省略のさまざまな技法について見てきた。その中には認識に関わるものも多かった。それらの技法について考えたり、実際に使ってみたりすることによって、認識や表現の幅が広がる。このことがレトリック作文の可能性の一つである。

紙幅が尽きたので、「間接」以下の技法については、続稿で述べることにする。

引用文献

- 飯間浩明2003『遊ぶ日本語 不思議な日本語』岩波アクティブ新書
 伊土耕平2008a「列挙法について」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』138号
 —— 2008b「主題と修辞(三)——村田喜代子『人が見たら蛙に化れ』の列挙法など——」『解釈』第54巻11,12合併号
 —— 2013「レトリック作文の可能性 その1 —技法の体系・配列・反復—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』153号
 尾上圭介1998「一語文の用法——“イマ・ココ”を離れない文の検討のために——」(尾上『文法と意味I』くろしお出版2001に再録のものによる)
 —— 2006「存在承認と希求」『国語と国文学』83の10
 佐藤信夫1978『レトリック感覚』(講談社学術文庫版1992による)
 中村 明2007『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版
 柳澤浩哉2011「体言止め(名詞止め)」中村明他編『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店
 山田孝雄1936『日本文法学概論』宝文館出版

